と誘いをうけていました。実業界のことなど何も知りませんでした。たった一度の人生、冒険してみるのもいいか。もし、うまくいかなかったら数学の家庭教師でもやれば、今の収入くらいは稼げるわいと、教員生活を去ったのです。

実業界は頑張れば結果が出る社会でした。勤めた年の暮れにはオイルショック、夜も寝られぬようなこともありましたが、それを乗り越えたところから会社業績も伸び、また韓国との木材取引などの機会があり、私は朴大統領と同じ軍官学校出身者ですから、重要な立場になっていきました。

我が人生を振り返ってみて、順風満帆には程遠い人生でしたが、家庭的にはよき女房にめぐり合っている、男子が二人、それぞれ大学を出て、何とか世間には名の知れた会社に勤め、家庭を持って孫もでき、まあまあ終り良ければすべて良しか。など、不遜なことを考えております。

シベリアで亡くなった友の分まで長生きしていただきたいと思うこのごろです。

シベリア抑留記

愛知県 加藤 三喜男

私は大正十一（一九二二）年三月春日井市坂下町で八人兄弟の長男として生れ育った。

成長して国鉄に就職し、浜松の車電区と言うところが、前年肋膜炎を患ったためか第一乙種合格で、兵隊にすぐ行くことはなかったが、昭和十八（一九四三）年四月、家から召集令状が来たからすぐ帰れと電話があり、職場の皆さんに送別会をしていただき家に帰り準備した。入隊の日の前日、親戚を始め隣組、友人、知人達と氏神様に参拝し、お別れの挨拶をして名古屋の親戚の家に泊った。朝一番の電車で中部第十三部隊の前に行くと、役場の兵事係の鶴飼秀三さんが待っていた。

召集者達五、六人が集ると第十三部隊の兵隊に引率され、営門をくぐった。営舎で軍隊の被服が支

給され、それを身に付け、その日から厳しい訓練の毎日が続いた。一カ月後冬服が支給され、満州国牡丹江省老黒山第二六〇三部隊へ転属命令が出て、名古屋駅まで徒歩。沿道は、どうして知ったか親や兄弟、親戚、知人が見送りに来て、名古屋駅まで送ってくれた。駅から軍用列車に乗り下関で下車、関釜連絡船で釜山に上陸、朝鮮鉄道で朝鮮半島を北上、満州国に入り老黒山に到着した。

第二六〇三部隊平井隊に配属になり、初年兵教育が始まった。半年後一期の検閲が終り、二六〇三部隊鬼頭隊本部付を命ぜられ着任した。着任後すぐ将校当番を命ぜられた。

昭和十九年五月第二六〇三部隊は、賓江省ハルピン地区の警備を命ぜられ、部隊はハルピンに移駐した。兵舎は内地と変わらず快適だった。

昭和二十年八月十五日ラジオで玉音放送があると言うので部隊長を始め、全員が放送を聞いた。

耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍びはよく聞えだが、全体的によく分からず、皆んな、呆然とし

ていると、部隊長が出てきて、全員を集めラジオで聞いた通り戦争は終わった。軍隊は今日解散する。部隊も解散するから、もう俺の指揮下ではない。自由行動をしてもよいと言われた。

二、三の者は、いつの間にか姿を消したが、あとの者は何することもなく日を過ごしていると、どこからの命令か分からぬまま、ソ連軍が破壊した鉄道を復旧しながら牡丹江へ、そしてウラジオストックから帰還するから、まず牡丹江へと、線路伝いに歩く。何日か歩いて海林の兵器廠跡に到着。一カ月ぐらい生活した後、牡丹江に入る。二、三日暮らしたら列車が来て貨物列車に乗車、東の方に行くかと思つたが列車は反対の北西に向って走り続けた。

ある日、海だと思つた湖畔がバイカル湖と分かり、帰還はだめだと、全員あきらめる。

十一月三日の明治節の日、夜間雪の中に全員下車、夜が明けるとそこは収容所の前で、収容所に入ると五十人単位で幕舎が割り当てられ入る。中

は中央が通路で、両側二段になっており、二箇の薪ストーブがある。上段の方が暖かいと思って上段の中央部に陣取った。収容所はタイセツトからバイカル湖の東側に沿って奥に入ったところでニールスカヤと言った。毎日薪とりで近くの山で切り倒した木を運搬するのが仕事で、腹が減って大きい物は誰も敬遠するがこれもノルマがあつて、ある程度の大きさの物を持って運ぶ。二、三カ月たつて生活も落ち着いたころ、隣で寝ていた渡辺君が朝起きないので、ゆすつたが起きない。よくみると死んでいた、凍死かもしれない。死体を埋める穴を掘るが、これが凍土でコンクリートに穴を掘るようなもので、なかなか掘れない。焚火をして溶けたところを掘り、一日中かかつてどうか死体が隠れるほど掘って埋めた。埋める前に頭の毛と手の爪を切って紙に包み自分の身につけ、戻ったら家族に渡すつもりで持って帰り、名古屋市中村区の家族をさがして渡した。

朝七時の点呼は、外で真つ暗の中で行い、朝食

は、薄い実のないスープと黒パン一個、天秤にかけ分配される。食事に集中する飢えた目、空腹感はいつも満たされることなく続いた。作業は薪とりで、伐採は人の背丈ほどもある二人用の鋸を使って木を切った。風呂のことを温湯（ポントウ）

と言った。シベリアに入つて三日目ごろ、ある日、今日は風呂があると言うので日本の風呂を想像してゆっくり温まれるかと思つて裸になつて入つて行くと真暗な部屋に蒸気が立ち込め、湯の入つた桶を渡され、これで身体を洗つて終り。牡丹江を立つ前に入つたドラム缶の風呂が思い出された。その間衣服は消毒されたようで南京虫やシラミはしばらくいなくなつた。夏は日が長く八時、九時ごろまで明るく、白樺の木で麻雀パイを作り麻雀をして遊んだ。このとき始めて麻雀を覚えた。

ある日、作業変更で、室内に残っていると呼び出しがあり、行くと脱穀作業で籾を米にする作業だった。太い丸太を切り、溝を付けて臼を作り、籾を米にする仕事で、筵や唐箕とうみも作つて五、六人

で毎日作業した。

眼の前に真白な米が出来、思わず口に放り込む、あとはストーブで炒って食べた。このお陰で体力がつき元気になったが、この作業もほどなく終り、転属でトラックに乗せられ何キロか奥へ行った。見渡す限りの原野の中で、道路工事に従事した。道路工事と思つたが今思えば鉄道工事だつたと思う。

昭和二十二年の夏、少し熱が出て監督に話すと熱を計り、三七度五分ですぐ休養を言われて休んだ。日本人の平均体温とソ連人の平均体温はソ連の方が低く、三七度五分は日本の三八度ぐらいに思われたらしい。

一日休養していたらトラックに乗せられ南下、今度は貨車に乗せられそのままナホトカに到着。ナホトカに二、三日おつたら思いがけず乗船命令が出た。(中にはナホトカから戻されると言う話もあった。)

昭和二十二年八月十一日夢に見た舞鶴港に上陸。

戦前の海軍の宿舎で一泊、大きなお湯のいっぱい入った風呂で長年のアカを落した思い出は一生忘れない。

四年四カ月振りで幸運に恵まれ戦友達より早く帰還した。お陰で戦友達の自宅を知多半島から岐阜県の郡上まで一軒一軒報告に歩いた。

【執筆者の紹介】

現住所 愛知県春日井市坂下町

学歴 名古屋電気学校卒

軍歴 昭和十八年四月 中部第一三部隊

兵科 輜重兵

階級 兵長

終戦地 ハルピン

復員 昭和二十二年八月十一日 舞鶴港上陸

復員後の経歴 国鉄就職 稲沢貨車区主席助役で

退職

退職後 坂下町区長・坂下神社総代長等勤める

(愛知県 河村 廣康)